第 19 回講演

学都・熊本の国際化を考える

ーイギリスで生まれ、熊本に住んで２０年ー

講師　熊本県立大学 文学部 英語英米文学科 教授

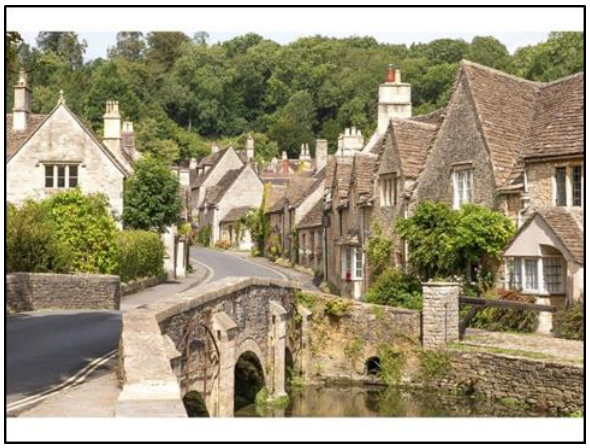
レイヴィン　リチャード　氏

ただ今ご紹介頂きましたレイヴィンと申します。よろしくお願いします。本日の講演会では、「イギリスの街、日本の街」「イギリスの教育制度、日本の教育制度」「言語教育について」「住みやすさについて」の４つのトピックでお話したいと思います。

１．　「イギリスの街、日本の街」

イギリスの街というと皆さんどこを思い浮かべるでしょうか？まずはロンドンでしょうか。

それから、イギリス人も日本人もとても好きなコッツウォルズ。



他には、劇作家シェイクスピアの出身地であるストラトフォード。

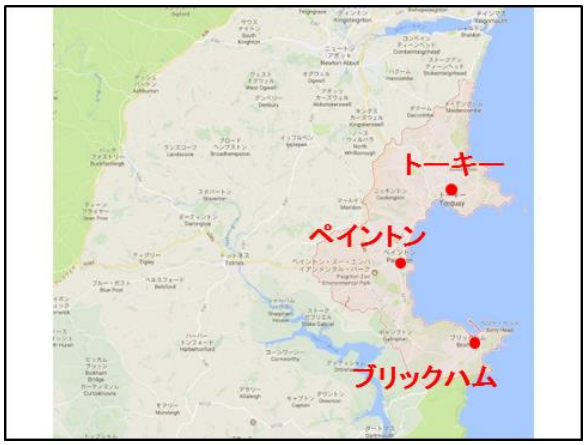
ピーターラビットの作者が住んでいた湖水地方もあります。

そのほか、会場の皆様からは、ポーツマス、エディンバラ、ウェールズ、リヴァプール、グラスゴー、ブラックプールといった声が挙がっています。全体的にロンドン周辺とその北側のエリアが多くなっています。この偏りの一つの要因は、日本で目にすることのできる各街の情報量の差とも言えるでしょう。

次に私の故郷を紹介します。私が生まれ育ったの

はトーベイというイギリス南西半島の海辺の街です。

トーベイはブリックハム、ペイントン、トーキーの３つの町から成っています。各町の風景を紹介します。

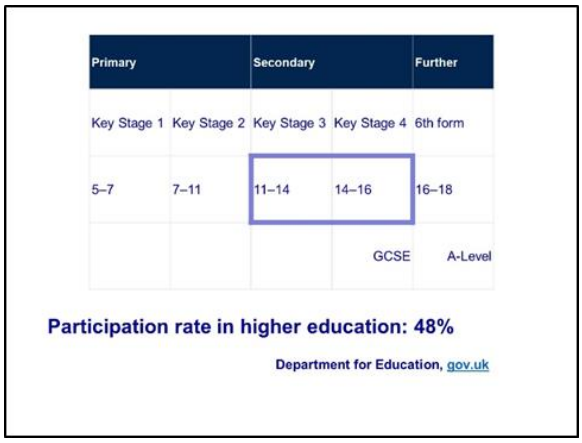


私が実際暮らしていたのは、今紹介したような街の中ではなく、もう少し田舎のガンプトンという村です。ガンプトンの様子と私の生家をご紹介します。

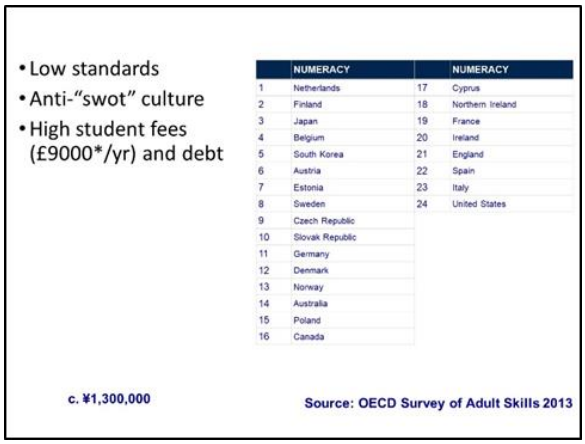
皆さんグリーンウェイ・ハウスはご存知ですか？作家アガサ・クリスティの別荘です。この別荘が私の家の隣にあり、父はアガサ・クリスティの家の庭師を務めていました。

２．　「イギリスの教育制度、日本の教育制度」

イギリスの学校教育は、Primary（一等）、Secondary（二等）、Further（継続）、Higher Education（高等教育）に分かれており、5 歳から 16 歳までの Primary および Secondary が義務教育になります。Primary と Secondary の 2 つの教育段階は、さらに 4 つのキーステージ（KeyStage1＝5～7 歳、KeyStage2＝7～11 歳、KeyStage3＝11～14 歳、KeyStage4＝14～16 歳）に分けられています。Primary と Secondary の教育をそれぞれの学校で受けることになり、Primary の学校は日本での小学校に近く、Secondary の学校は日本での中学校と高校が一緒になっているような学校です。



では、イギリスの教育の問題点について考えてみましょう。

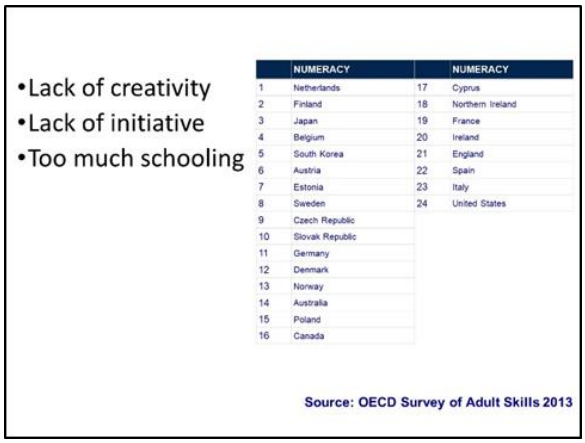


１つ目は、「Low standards（学力水準の低さ）」です。2013 年に OECD が発表した算数の国別学力ランキングを見ると、1 位オランダ、2 位フィンランド、3 位日本に大きく差をあけられ、イギリスは 21 位となっています。こうなってしまった理由は様々な説がありますが、その一つとして改革が多すぎて、カリキュラムや制度がすぐに変わってしまうからであると言われています。

2 つ目は、「Anti-“swot” culture」です。swot とは勉強熱心という意味で、イギリスでは勉強ばかりしすぎる事をよしとしない風潮があります。「勉強していないのに成績が良い」というのが格好良いと思われています。

3 つ目は、「High student fees and debt（学費が高い）」です。以前は 3,000 ポンドほどであった国立大学の年間の学費が、2011 年頃から 9,000 ポンド（日本円でおよそ 130 万円）となっており、日本の国立大学と比べても 2 倍以上の高額といえます。

次に日本の教育の問題点について考えてみましょう。私が感じている事を 3 点挙げます。



１つ目は、「Lack of creativity（創造性の欠如）」です。この課題については、制度改革もあり、ゆとり教育と呼ばれる、つめこみ教育を減らし、創造性

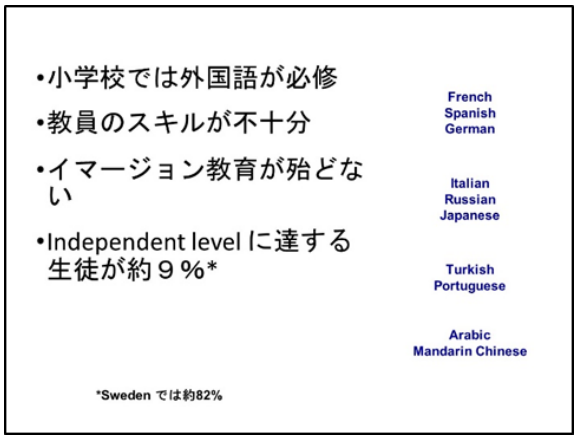
を養うという取組みがなされた時期もありましたが、創造性が育まれた実績はあまり実感できないのではないでしょうか。

2つ目は、「Lack of initiative（主体性の欠如）」です。個人の主体性を発揮する場が少ないと感じる一方で、集団の主体性はあるように感じています。例えば体育大会での組み体操など、もちろん教師の指導もあると思いますが、生徒の主体性を発揮し、一つの形を作り上げているように感じます。

3つ目は「Too much schooling（多すぎる授業）」です。これは学校だけを指しているのではなく、学校の授業があり、さらにその上で多くの人は塾へも通っているという状況を指します。前述の主体性の欠如とも関連しますが、これだけ授業をつめこまれると、自分で「こうしよう」と決めてなにかに取り組むといった事をいつ行えるのかと疑問に感じます。その分知識量はイギリスの子供より多いのだと思います。

3．　「言語教育について」

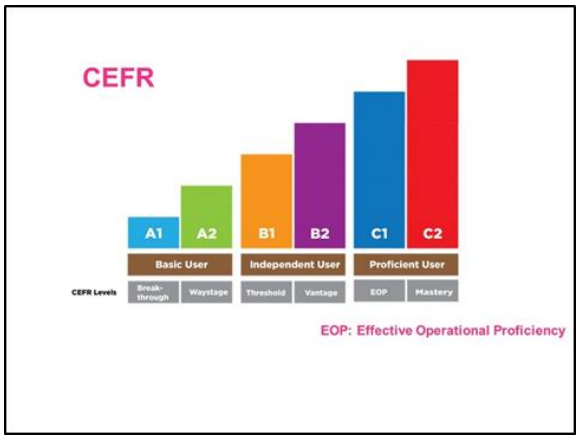
ここではまずイギリスでの外国語教育の現況をみてみましょう。



イギリスでは外国語が小学校でも必修になっていますが、教員のスキル不足という状況があります。例えば、高校時に勉強しただけのフランス語を、20年後、先生として生徒に教えなくてはならないといった事も多々あるようです。

次に、ヨーロッパの中ではドイツや北欧の国で、英語を話す能力が高い人が多い傾向にあります。さらに英語だけでなく、第2外国語も含めて3ヶ国語を話せる方も多く、日本やイギリスとは大きく違います。また、カナダやスペインにおいては、イマージョン教育という、すべて（または半分）の授業を学びたい言語で行う（例えば化学をフランス語で学ぶ等）という方式を採用していますが、イギリスでそういった取り組みはほとんどありません。イギリスも日本と同様に島国であり、英語がどこででも通用するという考えがどこかにある為、外国語の習熟度が上がっていかないという状況があります。

最後に、外国語の能力が、イギリスでは義務教育を終えた時点で Independent level に達する生徒が約 9%しかおらず、スウェーデンでは 82%である事に比べて、圧倒的に低くなっています。この Independent level というのは、CEFR という外国語の能力を測る一つの指標のなかのレベルを指します。CEFR では、例えば「レストランで好きなものを注文できる」といった、“できること”でレベル分けをして、外国語の能力を測るものです。（Independent level とは､その言葉が話されている地域を旅行しているときに起こりそうな、たいていの事態に対処することができるレベル）



日本でも CEFR 日本版の CEFR-J を適用しようという動きがあるようです。

では、日本での外国語（英語）教育の課題を挙げてみましょう。

- Lack of communication in classes
  - Gradually changing
- Lack of reading
  - Textbooks are short
  - Not enough pleasure reading
- Lack of free composition

まず、授業の中で会話などのコミュニケーションを学ぶ機会の不足があります。これまで何度もカリキュラムの見直しがありましたが、なかなかコミュニケーションに時間を割くことはできないようです。特に進学校ではこの傾向が顕著です。

また、日本の英語教育を考えるとき、「読み書きはできるが、話せない」といった話をよく聞きますが、TOEIC のスコアを見るとリーディングのスコアがすごく低いという状況があります。これについて私は、日本人は圧倒的にリーディングが足りないと思っています。教科書への親しみやすさを重視してか、テキスト量が少ないのです。

TYPICAL NUMBERS OF WORDS IN TEXTBOOKS IN THREE COUNTRIES

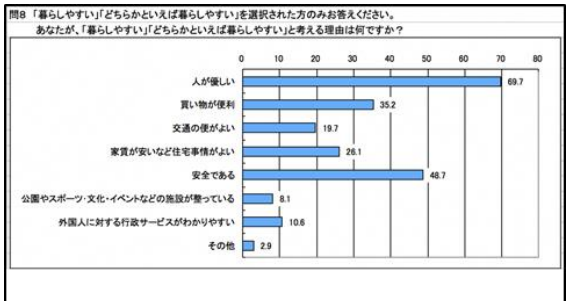
	JUNIOR HIGH	SENIOR HIGH	TOTAL
MEXICO	126,043	106,493	232,536
KOREA	23,483	37,950	61,433
JAPAN	14,066	20,977	35,043

Rob Waring, Notre Dame Seishin University (Okayama)

メキシコ、韓国、日本の中学・高校の英語の教科書に入っている語数を比較した表を見てみると、日本の 35,043 語に対して、韓国では 61,433 語、メキシコでは 232,536 語と圧倒的な差が生まれています。その他にももちろん、教科書以外の本を読まないといった問題もあるでしょう。

4.　「住みやすさについて」

熊本市が実施した、市内にすむ外国人を対象としたアンケート結果の、熊本市を暮らしやすいと感じている理由をみてみましょう。



熊本市都市　外国人集計結果(H26)

1 位は「人が優しい」、これは私も実感しています。2 位は「安全である」です。熊本をはじめ、日本ではどこでも、犯罪に巻き込まれる可能性が、他国の都市に比べて格段に低いのではないでしょうか。この治安のよさはとても大きいと思います。一方で、「公園やスポーツ、文化イベントなどの施設が整っている」や「外国人に対する行政サービスがわかりやすい」といった理由で住みやすさを感じている割合は低いようです。

エコノミスト誌がまとめたイギリスの住みやすい街ランキング（医療、教育、安定性、文化と環境、社会基盤といった基準で順位付け）の 1 位はマンチェスターです。

"Manchester has been on an upward trajectory for the best part of two decades now and wherever you look – be it science, transport, culture, property, investment – there is evidence of huge positive change helping to make life here significantly richer.... We've got award-winning museums and galleries, a packed calendar of theatre and cultural events, a burgeoning food and drink sector and class sports institutions like Manchester United and Manchester City throwing a global spotlight on to the city each weekend."

–Andrew Stokes, chief executive at Marketing Manchester

Population: 540,000

イギリスでは 1 位のマンチェスターですが、世界では 46 位という結果になっています。

世界トップ 5 の都市をみてみると、オーストラリアとカナダからそれぞれ2都市ずつ選出されています。この住みやすさ上位の町街の共通点としては、中規模の都市、人口密度が高すぎない、犯罪が少ないといった点が挙げられます。

住みやすさの視点で熊本をみたとき、街の中心部にビジネスの環境と住環境が共存している点がよいところであると感じます。今後もこの環境が保たれるよう舵取りしていく必要があるでしょう。

その他、外国人が暮らしやすいと感じる大きな要因の一つである言語サービスを見てみましょう。

ストラスブルグはフランス語とドイツ語、英語のウェブサイトを持っています。一方メルボロン、トロント、バンクーバーやロンドンは英語のサイトだけです。これに比べると、英語、韓国語、中国語の 3 ヶ国語に対応している熊本市のホームページは充実していると言えるのではないでしょうか。但し、熊本市のホームページでは、観光以外の外国語情報が少し少ないのではないかと感じます。

ここで一つ提案です！

緊急通報の電話番号を世界共通にすると皆分かりやすく、安心なのではないでしょうか？イギリスでは 999 番で警察、消防、救急すべてに対応しています。このように、1 つの番号で全ての緊急通報に対応し、さらに全世界共通であればどこへいっても安心感がありますね。

最後に、今日はイギリスのいくつかの街の風景をお見せしましたが、イギリスのほとんどの街は、その町それぞれの雰囲気があります。日本では、どこもおなじような風景というのが多すぎるように思います。街の全体的な景観や歴史性をもう少し大切にする視点が必要なのかなと感じています。

ご清聴ありがとうございました。

【講演録要旨】

熊本県立大学文学部　英語英米文学科　教授　レイヴィン　リチャード氏をお招きして、「学都・熊本の国際化を考える～イギリスで生まれ、熊本に住んで 20 年～」をテーマに、講演会を開催しました。

イギリスで生まれ育ち、その後日本に約 30 年（内熊本には約 20 年）住んだ、イギリスと日本双方での経験を踏まえ、様々な観点からイギリスと日本、イギリスの街と熊本を比較しながら、生活、教育制度等について考察し、熊本の国際化という視点からご説明頂きました。

まず、多くの美しい写真を交え、イギリスの街をご紹介頂き、その後、イギリスと日本の教育制度の比較を通して、それぞれの問題点などもご指摘頂きました。

また、外国語教育については、イギリスも日本も島国であるという共通点から、どちらも他の国々に比べて外国語の習熟度が上がりづらい現状をご紹介頂きました。

最後に、外国人から見た熊本の住みやすさという事で、安心・安全等の要因で住みやすさを感じる割合は高いが、公園やスポーツ、文化イベントなどの施設の充実度や行政サービスの分かりやすさにより、住みやすさを感じている割合は低いことなどをご指摘頂きました。

＜研究員報告＞

「里地里山の保全に関係する国際・国・地方自治体の政策概観」

熊本市都市政策研究所　研究員　市川　薫

熊本市都市政策研究所第 19 回講演会

日時:平成 29 年 8 月 9 日（水）15～17 時
場所:熊本市現代美術館　アートロフト

次　第

１　開　　会

２　所長挨拶　　熊本市都市政策研究所　　所長　蓑茂　壽太郎

３　講　　演　　「学都・熊本の国際化を考える
　　－イギリスで生まれ、熊本に住んで 20 年－」
　　熊本県立大学　文学部　英語英米文学科
　　教授　レイヴィン　リチャード　氏

４　質疑応答

５　研究員報告　「里地里山の保全に関係する
　　国際・国・地方自治体の政策概観」
　　熊本市都市政策研究所　研究員　市川　薫

６　閉　　会

第 19 回講演会　講演者のご紹介

熊本県立大学　文学部　英語英米文学科　教授　レイヴィン　リチャード　氏

●1962年イギリスTorbay生まれ。
●Leeds大学文学部卒業、Sheffield大学文学研究科修了。
●1987～1990年JETプログラムにて天草でALT。
●これまでフランス語、ドイツ語、ラテン語、北京語、広東語、日本語を学ぶ。現在はスペイン語、タイ語を勉強中。
●2002年～熊本県立大学勤務。現在は文学部教授で、英語英米文学科の学科長を務める。
●研究分野は応用言語学。質的研究法、内省的研究法を用いて、外国語の能力が日々の勉強や言語体験の中でどのように発展していくのか、スムーズに上達する場合とそうでない場合はどこが違うのかといったテーマで研究を行っている。

～これまでの講演会～

第１回 平成 24 年 10 月 23 日	「熊本市都市政策研究所に期待すること～少子高齢化社会に向けて」 一般財団法人計量計画研究所代表理事　黒川 洸 氏
第２回 平成 25 年 2 月 15 日	「環境未来都市　くまもとの都市計画ビジョンと課題」 国立大学法人熊本大学副学長　両角 光男 氏
第３回 平成 25 年 5 月 10 日	「日本農業の活路を探る」 名古屋大学農学部教授　生源寺 眞一 氏
第４回 平成 25 年 7 月 2 日	「都市づくりと流域環境思考」 東京都市大学教授･造園家　涌井 雅之 氏
第５回 平成 25 年 8 月 22 日	「地域経済の再生と構造変化」 慶應義塾常任理事･慶應義塾大学名誉教授　清水 雅彦 氏
第６回 平成 25 年 10 月 11 日	「市民協働のまちづくり～ワークショップを知ろう～」 熊本県立大学教授　明石 照久 氏
第７回 平成 26 年 2 月 7 日	「元気で楽しい都市に観光客はやってくる」 公益財団法人日本交通公社ｼﾆｱ･ﾌｪﾛｰ　小林 英俊 氏
第８回 平成 26 年 5 月 22 日	「生涯現役社会づくり」 NPO 法人ｱｼﾞｱﾝ･ｴｲｼﾞﾝｸﾞ･ﾋﾞｼﾞﾈｽｾﾝﾀｰ理事長　小川 全夫 氏
第９回 平成 26 年 8 月 12 日	「子どもが地域愛を育むﾌﾟﾛｾｽーまちづくり･地域活性化原論としてー」 東京農工大学名誉教授　　千賀　裕太郎　氏
開設 2 周年記念（第 10 回） 平成 26 年 11 月 5 日	「地域を担う人材育成と地域の自立」～ﾊﾟﾌﾞﾘｯｸｶﾞﾊﾞﾅﾝｽ改革～ 九州大学産学連携センター教授　谷口 博文 氏
第 11 回 平成 27 年 2 月 5 日	「超高齢･人口減社会に挑戦する健「幸」まちづくり～スマートウエルネスシティを目指して～」筑波大学大学院人間総合科学研究科教授　久野 譜也 氏
第 12 回 平成 27 年 5 月 21 日	「政策創造と人材育成」 熊本大学政策創造研究教育センター教授　上野 眞也 氏
第 13 回 平成 27 年 7 月 31 日	「縮小時代の都市政策」 豊橋技術科学大学学長　日本学術会議会長　大西 隆 氏
第 14 回 平成 27 年 11 月 4 日	「デザイン・イノベーションの時代」 崇城大学大学院芸術研究科長　芸術学部デザイン学科教授　本間 康夫 氏
第 15 回 平成 28 年 2 月 5 日	「地域継続と事前復興からの国土強靭化の発想～想定外の災害に備えるためには～」明治大学政治経済学研究科･危機管理研究ｾﾝﾀｰ特任教授　中林 一樹 氏
第 16 回 平成 28 年 11 月 7 日	「災害に負けない地域づくりを目指して～幅を持った社会システムの構築を～」前　国土交通省国土地理院長　越智　繁雄 氏
第 17 回 平成 29 年 2 月 6 日	「地域・大学・行政の連携ーその意義と可能性ー」 熊本県立大学総合管理学部准教授　澤田 道夫 氏
第 18 回 平成 29 年 5 月 16 日	「自治体環境政策の最前線ー政策法務の観点から展望するー」 首都大学東京　都市教養学部　都市政策コース　教授　奥 真美 氏

熊本市都市政策研究所 第19回講演会

講演会
入場無料
（事前申込み
が必要です）

学都・熊本の国際化を考える
～イギリスで生まれ、熊本に住んで20年～

日　時

平成29年
8月9日 水
15:00-17:00
（予定）

イギリスで生まれ育ち、その後日本に約30年（内熊本には約20年）住んだ、イギリスと日本双方での経験を踏まえ、様々な観点からイギリスと日本、イギリスの街と熊本を比較しながら、生活、教育制度等について考察し、熊本の国際化という視点から、熊本がもっと住みやすい街になるためには何ができるのかを考えます。

熊本市現代美術館
アートロフト
（熊本市中央区上通町2-3）

（講師）
熊本県立大学文学部
英語英米文学科　教授

レイヴィン　リチャード氏

※ このほか、熊本市都市政策研究所からの研究報告もあります。

- 講演会終了後、講師を囲んで意見交換会を開催します。
  （軽食、ドリンク付き〔会費：2,000円〕）
  時間：17時20分より1時間程度
  場所：Bouche's Cafe（ブーシーズカフェ）
  熊本市中央区上通町5-10桜井ビル2階

※ 本講演会は都市計画ＣＰＤの認定プログラムです。

・1962年イギリスTorbay生まれ。
・Leeds大学文学部卒業、Sheffield大学文学研究科修了。
・1987～1990年JETプログラムにて天草でALT。
・高校でフランス語、ドイツ語、ラテン語を、大学で北京語、広東語を、大学院で日本語を学ぶ。現在はスペイン語、タイ語を勉強中。
・1995年沢井箏曲院講師免許を取得。
・2002年～熊本県立大学勤務。現在は文学部教授で、英語英米文学科の学科長を務める。
・研究分野は応用言語学。質的研究法、内省的研究法を用いて、外国語の能力が日々の勉強や言語体験の中でどのように発展していくのか、スムーズに上達する場合とそうでない場合はどこが違うのかといったテーマで研究を行っている。

◆ お申込み方法 ◆

電話かインターネットで、熊本市コールセンターひごまるコールに、参加者氏名（１回の申込みにつき１０人まで）、電話番号をお伝えください。定員90名（先着順）

申込み期間：受付開始 7月5日（水）～締切り 8月6日（日）
●ＴＥＬ：ひごまるコール　電話番号　０９６－３３４－１５００
●インターネット：ひごまるコールホームページ　http://higomaru-call.jp/event

【主催】熊本市都市政策研究所（熊本市中央区花畑町9-24　住友生命熊本ビル5F）
TEL:096-328-2784　Mail: toshiseisakukenkyusho@city.kumamoto.lg.jp